人は教育によって人になる

町内の全部の保育所、小学校、中学の父母と先生の大会集会で、「子供の幸せのための教育」を協議されるのは、誠に壯観です。教育には地域環境が重大な関わりがありますので、年に一度はこうした町全体で考えることは、非常に重要なことと思います。

私たちの施設任運荘と騰々舎が直接的に皆様にお世話になっていきますことを、冒頭にお礼申し上げます。私を紹介されたお言葉の中で私たちの施設を「全国的にも独特な施設」といわれましたが、たしかに、任運荘、騰々舎は全国的にあるていどの評価を受けています。それはひとえに両施設を日夜支えている職員の努力によることですが、そのほとんどがこの緒方町の市民であります。

私は両施設を創めるにあたり、今住んでいる別府市の近くに土地を用意していましたが、当時の波多野町長が、ぜひ自分たちの緒方町に作ってくれ、土地も提供する、議会も全員一致賛成しているとのこと、この緒方に決めたわけです。ここに来てよかったとしみじみ思っています。職員の質の高さが他の土地で同じように確保

出来たかは、甚だ疑問だからです。

この機会に、二つの施設がなぜ独特のものとして評価されているかについて説明したい。

二つの施設が一致して目標を実現してはいますが、それは六点です。第一は「おむつが濡れたらすぐ替える」。第二「床ずれゼロ」。第三「間仕切りカーテンで雑居生活から人格の尊厳を守る」。第四、施設特有の悪臭をださない。第五、痴呆症や知恵遅れ等で異常行動が起こるのは世話する私たちの仕方が異常だから起こると反省すること。第六、入所者ひとりひとりの自由意志を決して束縛しない。

この六点、当たり前のことではないかと考える方もいるでしょう。本当はその通りです。人間がどこで生活しようと、施設内であろうと家庭であろうと、重い障がいや老衰で苦勞するようになれば、当然この程度の世話はしてもらわなければなりません。

しかし、施設側からすれば、一定の資金的ワクの中の建物の設備であり、一定のワクの中の職員の定数(老人ホームでは四、五人のお年よりに一人の職員の割合、それはとても少ない数です。)でお世話するのですから、この六点を実現することは、職員が昼夜を分かたず努力しなければなかなか出来ないことです。それを実現している施設が私たちの施設ですので、評価されているわけ

です。

ここに重要な問題がひそんでいます。福祉施設側からみれば大変な努力の結果である。それが福祉利用者の側から見ればごく当然のことにすぎない、その土台の上に更により世話が望まれているわけです。

このギャップに対して施設側が常に反省をしていないと、利用者に対していろいろ不都合なことを起こすこととなります。その反省のないところに、「施設は怖い」という現象が続出します。

ついでに、このことで二つの施設のことにふれて、皆さんの参考にしてもらいたいと思います。

六項目の実現とは、たまたま一つの施設にあるということではなく、二つの施設で共通に実現しているということ。一つは寝ついたお年よりの特別養護老人ホーム、もう一つは重度の障がい者のための療護施設、何れも利用者ほぼここで一生を過ごされる施設です。両施設とも棟続き廊下続きです。運営内容はちがっても、最低限度の施設の為すべき六項目については一致して実現していることを、ご注目頂きたいのです。騰々舎には長いこと「床ずれ一人」が続いていました。床ずれゼロの任運荘から、騰々舎に対し「その床ずれの方を任運荘に預けてくれないか、治してあげる」と申し込まれたのです。内心失礼など騰々舎側は思ったかもしれませんが。その日から、騰々舎は床ずれを治すまでは、職員は一切の懇親

会などの楽しみ事はしないと決めて、努力した結果、床ずれゼロが実現したわけです。

両施設間の切磋琢磨の一例をあげましたが、任運荘も騰々舎に強い刺激を受けています。

ともあれ、教育のことから離れて、私たちの二つの福祉施設のあれこれについて述べました。この機会に福祉の一面を知って頂きたいことと、この施設を担う人たちが貴重な人材は、この町の方がたであることを申ししたかったわけです。

さて、本論である教育の問題について述べましょう。

教育に専門家なし

子供の教育についての今日の集まりです。多分、父母の皆さんは学校の先生方を日頃教育の専門家として見られていると思います。それに対して、自分たち家庭の親たちは教育では素人と考えておられるかもしれせん。先生方もまた、教育に専門家はないと言われると、何かしら納得できないものを感じることでしょう。

なぜでしょう。

教師は教育を職業としている、職業としての教職が厳然と存在します。その意味で、先生方は教育の専門家であるとされます。たしかに、上手に子供集団としての学

級や学校をよく指導されている。個々の子供たちに鮮やかに対応している。だから父母が先生方に教育の専門家としての期待をかけているのはごく自然です。

そうかといって、自分の子供の教育を専門家に任しておけばよいということにはならない。人は教育によってのみ人になるのです。私たちが今、人として生活をしているのは、主として親たちの教育によってなっていることです。また、皆さまの子らが人らしく生活しているのも、皆さまの教育によってできていることで、決して学校教育が中心になってできていることではないでしょう。

私たちは教育の中で育ち、教育によって人になり、また、子らを教育して人らしくならせています。だから当然のことながら、私たちは教育者です。では専門家と私たち普通の人たちとは教育についてどこが違うか。両者に根本的な差はない。「人間の教師」といわれるソクラテスは、一度だって教師であったことはないと言っています。少なくとも「お金をとって人を教えたことはない」と、法廷最後の弁論でも明言しています。しかし、彼の言説には随所に秀れた教育論が展開されています。

私は若き日大学で教育学を専攻しました。旧制の中学や二つの師範学校で教師もしました。その経験からしましても、授業や教科を教えはしたが、とくに教育をしたという実感は全くありません。ふつう、先生方も自分を

教職員とは思っても、教育者であるとは考えていないでしょう。はたから教育者と言われ、そう見なされているだけにすぎません。

しかし、たしかに、先生方は教育素人の親たちよりは、子供に対する距離の取り方が上手です。なかにはとてもひどい教師がまざっていることもあります。それについては具体的に例をあげるのに一つも苦労しません。以前みたいに、師範教育でみっちり教育道を教えることがなくなったので、若い先生方にはだめなのが混じりがちです。経験も何もない青年がそのまま教師となるのですから、ご本人も教えられる子供らも大変な目にあっていることになりました。以前の師範教育ではそういう経験の浅さを前もってカバーする24時間教育がなされていたので、新卒の青年教師には、かえって理想的教師像を見ることが多かったのです。

現今の青年教師の経験不足を補うものとして、先輩先生の教育助言が必要になります。とくに校長の任務の重要なものとしてその教育があげられねばなりません。

さて、その教育的距離、いかにも専門用語らしく聞こえますが、簡単なことです。子供をよく眺めることの出来る距離です。距離が遠すぎて近すぎてもよく見えません。遠いというのは、他人の関係で、どうしようと勝手にせよといった形の人間(教育)関係。近すぎるとい

うのは、丁度母親が陥りやすい子供と一緒くたになつて、喜んだり悲しんだりする姿で、子供の心身の状況を冷静につかめないことです。

上手な立派な先生は、その子供との距離を縮めたりゆるめたりして、子供の姿をたしかにとらえて応対しているわけです。ですから、いわゆる素人の父母たちは、教育的距離の保ち方を先生方に学ぶことが必要です。親子の間では、教育的距離はとりにくいが、努力すれば自然ととれるようになります。適当な距離、わが子が本当に見える距離をとろうとすることは、理性的な働きです。子供が見えてくるということは、とりもなおさず方法が見えてみえてくることです。

ふしぎなことに、子供が見えてくるということは、自分自身がよく見えてくることでもあるのです。子供をよく知っているつもりで、実は自分のほうで一方的に子供に押し付けていた、自分本位の見方にすぎないこと気付くわけです。親の愛が深まると、相手の子供を見る眼が深まります。一度深まったからといって、もうそれでよいというのではない。たえず、ことごとくに深まりがなければならぬ。愛はその深まりを求めやまない性格のものである。親の子への愛はまちがいないもの、純粋なものと思うのはまちがいです。いつも反省を求められているもの、それが愛です。

私の恩師下村湖人はその著『次郎物語』で、教育論を

展開しています。次郎は生まれるとすぐ里子に出されませんが、就学前になるので実家に引き取られます。母のお民は素朴素野に育っている次郎にがまんできず、一生懸命教育をします。それが次郎をますます反抗的にさせ、母をいらだたせる。次郎が六年生の時、お民は病に倒れる。死の床で次郎の里親だったお浜にしみじみ述懐します。「あたし、この子にもお前にもほんとうにすまなかつたと思うの。子供つてただかわいがつてやりさえすればいいのね」。

湖人が言いたいことは、教育の根源に「愛」がなければ、いかなる教育的作用も無意味、有害だということである。少なくとも幼い子らの少年期までの教育においては。

世の親たちが専門職としての先生方に学ぶことは多い。同時に、先生方は素人の親たちに深く学ぶことがなければならぬ。「この子の親ならどう考えるだろうか」という問いを忘れてはならない。だから、子の教育は教師と親たちとの共同作業であるところにその完全性が保障される。

私の住んでいる市の中学校の話です。音楽の時間、その日は縦笛の練習です。若い音楽の女先生が教壇から見ると、一人片手だけで持っている。つかつかとその子に近づいて、ピチリッ横面をたたきつけたのである。余り